



文化博物館だより 第187号

2007年9月13日

みなさん、こんにちは。今日は開催中の企画展「兵庫のやきものとその周辺」にまつわるお話を。

● ギャラリートークがありました

9月8日(土) 日本陶磁協会明石支部の善入達甫氏ぜんにゆうたつ ぽによるギャラリートークが行われました。丹波焼の壺の底辺が小さいのは、斜面につくる登り窯に理由がある。同様の理由で古いものは底が曲がっている。三田焼は民窯だったので、藩の意向にとらわれず、市場の需要に応じた自由な作陶で昭和まで続いた等、県内各地のやきものの特徴やその背景について分りやすく解説してくださいました。善入氏は1人1人に語りかけるような穏やかな語り口でお話しくださり、聴講の方々も熱心に頷いておいででした。中にはメモを取る勉強家な方も。ギャラリートーク終了後も、聴講の方から窯の読み方や陶器せっきと炆器せつきの違いについて等の質問がありました。善入氏は常設展示室のやきもののコーナーに場所を移し、じっくり解説してくださいました。



9月22日(土)にも日本陶磁協会明石支部の方によりまずギャラリートークを行いますので、是非お越しください。

● ある日の展示室での親子の会話



「えっへん」
のポーズ?

娘「あれは何？」
父「なんだろうね、傘立てには小さいね」
娘「宇宙人みたい。足がたくさんあって、
腰に手をあててる」

話題の的は東山焼 青磁爵しやく(【爵】中国古代の温酒器)です。言われてみると、
触角のような目のようなものがあるように見えてきますね。みなさんは、何に見えますか。

やきものを見るには基礎知識が必要ではないかと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、本展では単純に見て楽しい作品も多数あります。何回かに分けてご紹介しますので、どうぞお楽しみに。

● ある日の展示室での親子の会話

父「へえ、明石焼なんてあるんだね」
息子「食べてるやん」
父「それはたまご焼きのことだよ(苦笑)」
耳で聞くと同じですが、目で見るとずいぶん違う二品。どちらも明石の名物
です。



明石焼白釉茶碗